

北海道を事例にした日本の野生動物管理の実践における保全医学の役割

メガン・オコーネル

キーワード：保全医学、野生生物保全、野生動物のリハビリテーション

1. 研究の背景と目的

保全医学は比較的最近登場した学際的な研究分野で、野生生物のリハビリテーションといった獣医学的取り組みをより効果的に野生生物管理計画に生かすことを目標としている。野生生物の救護活動は個々の生物・生物個体群・人間の健康・環境に害を与えないように行われる必要があり、生物が置かれている地理的位置や状況を正確に把握して計画し実施することが求められる。

本研究では、野生生物の保全に関わる人たちが保全医学の役割をどのような視点をもって捉えているかを明らかにする。事例研究では、東北北海道の東北部における絶滅危惧猛禽類（シマフクロウ・オオワシ・オジロワシ）の保全と個体数を維持するための救護・リハビリテーション・野生復帰の取り組みに焦点を当てる。

2. 研究の手法

本研究では活動の経過観察とアンケート調査を実施した。観察対象は北海道釧路市にある釧路野生鳥獣保護センターにおけるラプター日本生物医学研究所（IRBJ）の活動である。北海道における実地調査は2012年の春に行った。アンケート調査は環境省および北海道地方行政・地元のNGOにおいて野生生物の保全活動に関わっている人を対象に行った。質問項目は現在行われている活動の内容と、保全医学が将来日本における野生生物保全活動にどのように取り入れることができるかという点とした。

3. 結論

本研究を通して、環境省、北海道の地方自治体や獣医学の分野で活躍する人々が、保全医学の実践が「生態的な健全性」および陸生野生動物の福祉と関連した予防措置として支持し、その重要性を理解していることが示された。そして、彼らは、政府、一般の人々、専門家が日本の保全医学の将来に向けて連携できる機会がより増えていくととらえていた。